挑め！
壁の向こうへ

12/6デーリー

⑨「ジュノハート」開発

青森県産業技術センターの研究

12年間、交配150通り

安定生産、技術確立目指す

五戸町にある青森県産業技術センターりんご研究所県南果樹部。黒石市にある本所のりんご研究所では、リンゴの栽培技術や品種開発などに関する研究が行われているのに対し、県南果樹部では主にリンゴ以外の果樹を扱っている。ここで生み出されたのが、2020年の初競りで1粒2万円の値が付く鮮烈な全国デビューを飾ったサクランボの県独自品種「ジュノハート」だ。ハート形やその大きさ、味が高い評価を受け、今や青森を代表するフルーツに仲間入りした。現在は安定供給へ向けた研究が続けられており、さらなる知名度向上や生産者の収入増加を後押しする。

1997年、新たなサクランボの品種を生む育種が始まった。当時、「佐藤錦」が既に主力品種として広まっていたが、インパクトのある大玉品種の開発を目標に、08年までの12年間にわたり約150通りの交配が行われた。

交配試験2年目の98年、「サミット」を交配した「紅秀峰」の木から収穫した果実のうち、35個の種子で発芽に成功。後に多くの注目を浴びることになるジュノハートの第一歩が踏み出された。

その3年後には初めて結実。生育や品質で劣る物が次々と淘汰される中、2024年には1次選抜をクリアし、より詳細な調査が始まった。

そんな中、05年5月4日、県南果樹部の試験ほ場近くの山林で山火事が発生した。強風にあおられ、林野に次々と燃え移り、被害はほ場にも拡大。新品種育成に向けた原木など575本が焼失したが、ジュノハートの原木までは火の粉は届かず、何とか乗り切る〝強運ぶり〟を発揮した。

その後、系統名「オウトウ青森3号」として、各地のサクランボ農家による適応性試験もスタート。現場でも、その特徴でもあるハート形や良い味が確認され、周囲の期待も一気に高まった。13年12月16日、ついにジュノハートとして品種登録されることとなった。

翌年からは生産者への普及を目的に、県果樹苗木協会を対象とした内覧会を実施。生産者向けにもお披露目を行い、ジュノハートの魅力を伝えると、15年秋に初めて行った苗木販売では、本数が制限される人気ぶりとなった。

県南果樹部では、生産者との情報共有を行うため、おうとう「ジュノハート」普及促進研究会を設立。収穫の目安となるカラーチャートを、同センター弘前工業研究所と共同で作成したほか、栽培マニュアルも生産者に配布した。デビュー後の現在も、安定生産に向けた技術の確立や、着色、品質のさらなる向上に向けた研究が続けられている。

県南果樹部の内藤誠部長は「さまざまな場でジュノハートの名を聞くようになり、地域の活性化や農業の振興に結び付いていることが何よりもうれしい」と強調。ただ、新しい品種のため、適した育て方を追求する必要があると指摘し、「生産者をこれからも支えていく力となっていきたい」と力を込める。（小嶋嘉文）

ジュノハートの大きさや品質について研究する職員（青森県産業技術センターりんご研究所県南果樹部提供）

今年6月に行われたジュノハートの初競りでは、1粒3万円の値が付く盛況ぶりだった＝八戸市

◆青森県産業技術センターりんご研究所県南果樹部　1912年、既に広く栽培されていたリンゴへの病害虫がまん延している状況を受け、旧八戸町（八戸市）に県農事試験場八戸分場として設立。22年に五戸分場として移転し、72年に県畑作園芸試験場果樹部に。3年後に現庁舎が完成し、98年に県りんご試験場県南果樹研究センターと改めた後、2009年に地方独立行政法人化により、現在の名称となった。

※第1月曜日企画

令和３年１２月６日　デーリー東北　掲載

※この画像は当該ページに限ってデーリー東北新聞社が利用を許諾したものです